

弥永原遺跡 4

—第5次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第604集

1999

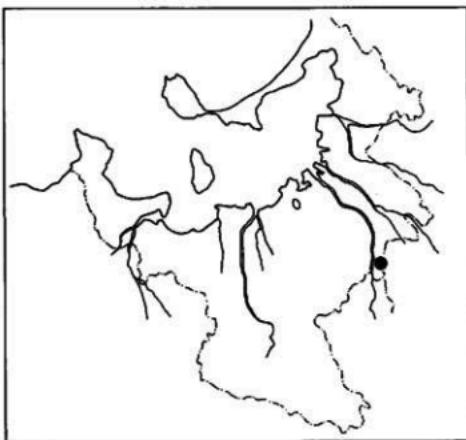
福岡市教育委員会

ya naga baru

弥永原遺跡 4

—第5次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第604集



遺跡略号 YNG 5

調査番号 9653

1999

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口として栄えた福岡市には、多くの文化財が分布しています。本市では文化財の保護、活用に努めていますが、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書はそうした遺跡のひとつで、南区弥永原遺跡内の戸建住宅建設に先だって行った発掘調査の成果報告書です。

発掘調査の結果、弥生時代から古代にわたる遺構、遺物が見つかりました。とくに弥生時代については、かつて周辺でガラス勾玉の鋳型、小型仿製鏡等が見つかっており、今回調査と合わせて、この地域にも奴国を構成する重要な拠点となるムラがあったことが証明されたと言えるでしょう。

発掘調査から整理、報告にいたるまでご理解とご協力をいただいた田中稔様をはじめ、多くの関係者の方々に対し、心から感謝しますと共に、本書が文化財に対する認識と理解、更には学術研究に役立てば幸いに思います。

平成11年1月14日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例　　言

1. 本書は戸建住宅建設に先だって、福岡市教育委員会が1996年11月26日～12月27日にかけて行なった弥永原遺跡第5次調査の報告書である。弥永原遺跡としては4冊目の報告書であるが、先の4冊はいずれも通し番号がない。本書は以下のような仮番号のもと、書名を弥永原遺跡4とすることした。

　　弥永原遺跡1　福岡県弥永原遺跡調査概報（福岡県文化財調査報告書第32集　1965）

　　弥永原遺跡2　福岡市弥永原遺跡調査概要（福岡市住宅供給公社　福岡市教育委員会　1967）

　　弥永原遺跡3　柳瀬東公園（弥永原遺跡群第4次）の調査「公園関係埋蔵文化財調査報告書I」
（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第219集）所収

　　なお本文中に引用する際には、この仮番号を使用する。

2. 検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Mを付して検出順に通し番号を付した。本章では、この番号からMを除き、遺構の性格を示す用語を付して、住居跡1、溝2のように記述する。

3. 本書で使用する方位は磁北である。

4. 本書で使用した遺構実測図は宮井善朗、中暢子が作成した。製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。

5. 本書で使用した遺物の実測図は宮井の他中暢子が作成した。また製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。

6. 本書使用の写真は宮井が撮影したものである。

7. 遺物実測図の番号は収蔵時の登録番号に一致する。

8. 本調査に関わる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。

9. 本書の執筆、編集は宮井が行なった。

本文目次

第1章 はじめに	
I. 調査に至る経緯.....	1
II. 調査体制.....	1
第2章 弥永原遺跡周辺の地理的、歴史的環境.....	1
第3章 調査の記録	
I. 調査の概要.....	4
II. 調査の記録	
(1) 検出遺構.....	6
1. 住居跡	
2. 溝	
3. その他の遺構	
(2) 出上遺物.....	9
1. 住居跡1出土土器	
2. 住居跡6出土土器	
3. その他の遺構出土土器	
4. 鉄・石製品など	
第4章 小結.....	10

挿図目次

Fig. 1 弥永原遺跡周辺の遺跡(1:25000).....	目次裏
Fig. 2 調査地点(1:4000).....	2
Fig. 3 弥永原遺跡3、4、5次調査地点(1:1000).....	3
Fig. 4 調査区位置図(1:400).....	4
Fig. 5 調査区遺構配置図(1:200).....	5
Fig. 6 住居跡1実測図(1:60).....	7
Fig. 7 住居跡2、6実測図(1:60).....	8
Fig. 8 遺構7、土壤1014実測図(1:40).....	9
Fig. 9 溝断面実測図(1:40).....	9
Fig. 10 出土土器実測図(1:3).....	11
Fig. 11 出土石器・鉄製品等実測図(1:2、1:3).....	12

図版目次

PL. 1 (1) 調査区全景(北から)	(2) 調査区全景(南から)
PL. 2 (1) 住居跡1(東から)	(2) 住居跡1完掘状況(東から)
PL. 3 (1) 住居跡2(北から)	(2) 住居跡2完掘状況(南から)
PL. 4 (1) 住居跡6(西から)	



- | | | | | |
|------------|-----------|-----------|------------|-----------|
| 1. 弥永原遺跡 | 6. 雷沢郷A遺跡 | 11. 笹原遺跡 | 16. 諸岡B遺跡 | 21. 三宅B遺跡 |
| 2. 曰佐原遺跡 | 7. 上曰佐遺跡 | 12. 井尻B遺跡 | 17. 高畠遺跡 | 22. 大橋E遺跡 |
| 3. 纏糸遺跡群 | 8. 曰佐遺跡 | 13. 五十川遺跡 | 18. 板付遺跡 | |
| 4. 春日丘陵遺跡群 | 9. 南八幡遺跡 | 14. 那珂遺跡 | 19. 郡岡君体遺跡 | |
| 5. 聖跡郷B遺跡 | 10. 三筑遺跡 | 15. 諸岡A遺跡 | 20. 野多目A遺跡 | |

Fig. 1 弥永原遺跡周辺の遺跡 (1:25000)

第1章 はじめに

I. 調査に至る経緯

1996年10月15日付けで、田中稔氏より、共同住宅の建設予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが出された。申請地は福岡市の周知の遺跡である弥永原遺跡内に位置しており、またかつて調査が行われ、弥生時代の環溝集落などが検出された調査地点に隣接しており、また申請地が住宅化の進む地域の中で、唯一といつていいほど残った山林であることから、埋蔵文化財課では審査願いを受けて96年10月29日に試掘調査を行なった。その結果申請地内には遺構が良好な状態で検出された。この成果をもとに協議を行ない、基礎工事によってやむを得ず破壊される部分と道路部分については発掘調査を行ない、記録保存を図ることになった。発掘調査は、田中氏との委託契約により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうことになった。調査は1996年11月26日に着手し、12月26日に終了した。

II. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊

調査総括 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝（調査年度） 柳田純孝（整理年度）

第2係長 山口譲治

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 西田結香（調査年度） 河野淳美（整理年度）

調査担当 埋蔵文化財課第2係 宮井善朗

調査作業 野村道夫 楠林司朗 河野龍哉 森田祐子 古賀典子 持丸玲子 平田浩美 山村スミ子
榎川ゆかり 森山キヨ子 石川洋子 篠原恵子 鍋山治子 坂本俊子

整理作業 中暢子 大石加代子 林由紀子 太田順子 武田祐子

また調査時の条件整備等に関して田中氏に多くのご配慮を賜った。また調査中には多くの方々のご教示を得た。記して感謝申し上げるとともに、本報告に十分生かせていないことをお詫びする次第である。

遺跡調査番号	9653	遺跡略号	YNG-5
調査地地番	福岡市南区曰佐3丁目88-1		
開発面積	915m ²	調査対象面積	300m ²
調査期間	1996年11月26日～12月27日		分布地図番号 26-0105

第2章 弥永原遺跡周辺の地理的、歴史的環境

弥永原遺跡は福岡市のはば南東端に位置する。福岡平野には那珂川、御笠川の二本の川が貫流する。両河川の間には須玖丘陵とそれから北側に派生して来る台地群が北側へ伸びている。台地内には、小規模な谷が多く入り込み複雑な地形をなしている。この台地上や、沖積地内の微高地に残って各時代の遺跡が残っている。弥永原遺跡は那珂川の東側、須玖丘陵の西側に伸びる細い舌状台地上に立地する。遺構突出面である地山は疊を多く混えるバイラン土である。

まず弥永原遺跡群内における既往の調査について簡単に触れておく。1次調査は、1959年にガラス勾玉の鉢型が発見されたことによる。その場所は3次調査A地点の環溝内とされる。2次調査（弥永原遺跡1）は1965年、福岡県教育委員会を主体とし、九州大学考古学研究室を主力とする確認調査が行なわれた。この調査で弥生時代後期の環溝が確認され、環溝には陸橋を伴うことも報告されている。

この他に後期の住居跡なども検出されている。また1次調査出土地点の近くから更に勾玉鋲型1点が出土し、1次調査のものと一对になるものと推定されている。2次調査は本報告が未完で、詳細については不明な点が多い。3次調査は1967年、福岡市教育委員会により行なわれた。弥永原団地造成に先立つての調査である(弥永原遺跡2)。大部分2次調査と重複する。2次調査で確認された環溝(B地区)は南端部で立上り、北端は徐々に浅くなることが確認されている。また南側のA地区では方向を違えるV字溝が検出されている。B地区環溝については断面箱型で、防御的な性格は弱いものとして報告されている。なおこの溝の延長は今回の5次調査地点では検出されていない。この他に住居跡も検出されており、最大の2号住居からは小形彷彿鏡も出土している。この後、重要な遺跡であるとの認識は持ちつつも、長らく調査が行なわれなかつたが、1988年、実に20年ぶりに4次調査が行なわれた。4次調査は公園建設に伴う調査で(弥永原遺跡3)、遺跡の西端部にあたる。弥生時代後期の溝、古墳時代の住居跡などが検出されている。

周辺の主な遺跡についても概観しておこう。日佐原遺跡は著名な遺跡であるが、現在福岡市教育委員会の文化財分布地図には記載がなく、弥永原遺跡と同一となっている。春日市との境界にあり、既に福岡女学院により、ほとんど破壊されているものと思われるが、弥永原遺跡との間は狭い谷部によって隔れており、別遺跡と考えた方がよかろう。日佐原遺跡からは、箱式石棺墓、甕棺墓などの埋葬構造が50基以上出土したといい、そのうちの1基からは長宜子孫内行花文鏡が出土している。時期的にも、規模的にも弥永原集落に対応する墓域であると考えられよう。弥永原遺跡の西側には警弥郷A、B遺跡がある。このうち警弥郷B遺跡では3次にわたる調査が行なわれており、弥生時代の水田、弥生時代から古墳時代にかけての生活構造が検出されている。また弥永原遺跡、日佐原遺跡の東側には須玖岡本遺跡、赤井手遺跡、竹ヶ本遺跡などを始めとする春日丘陵上の遺跡群が展開し、弥永原遺跡周辺は、弥生時代を中心とする遺跡が濃密に分布する地域といえよう。

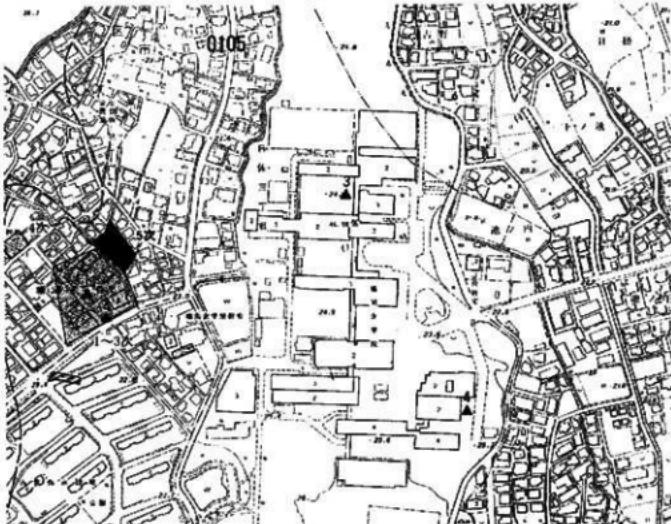


Fig. 2 調査地点 (1:4000)

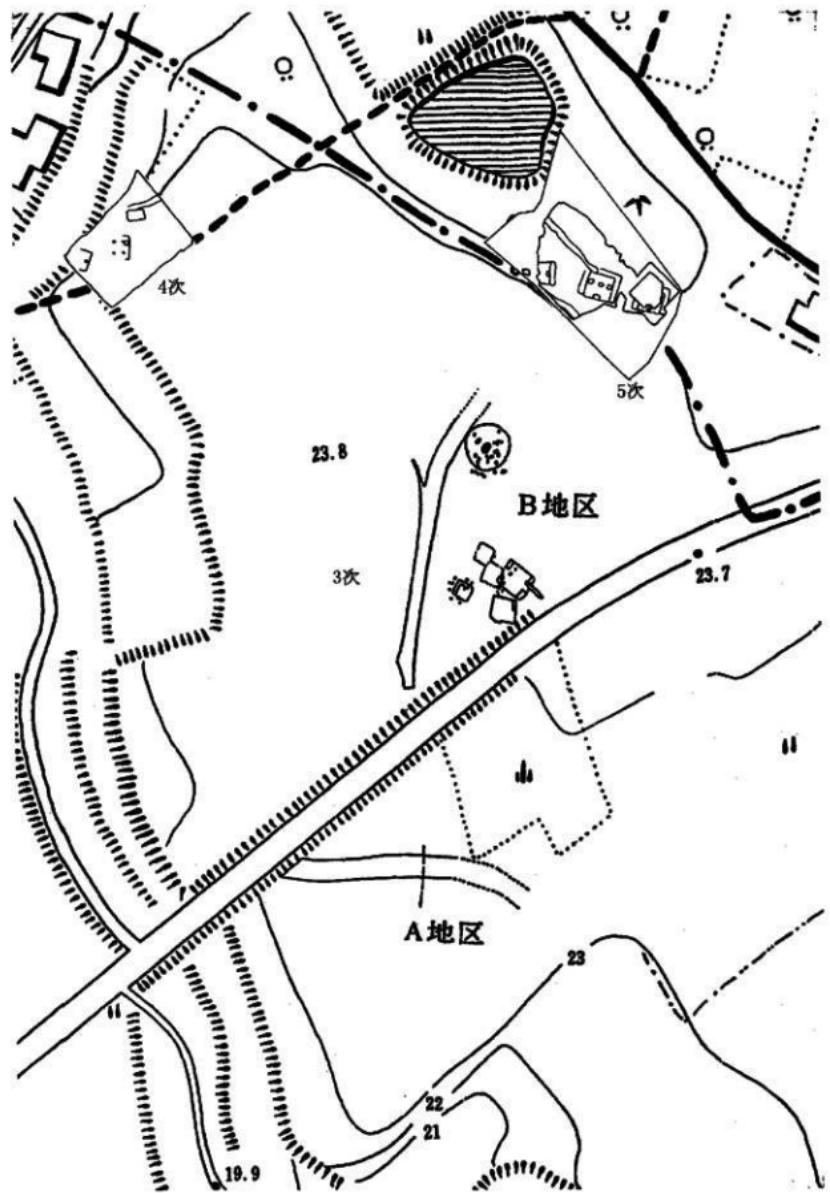


Fig. 3 弥永原3、4、5次調査地点 (1:1000)
 (地形図は1967年当時。「福岡市弥永原道路調査概要」所載の図2改変)

第3章 調査の記録

I. 調査の概要

弥永原遺跡5次調査地点で予定されていた開発行為は木造の戸建住宅であり、本来掘削を伴うものではなかった。そのため当初は進入道路部分に限定した調査を予定していた。しかし、調査前の状況が山林で、比較的大きな樹木が林立しており、開発時には立木の除去が必要であった。試掘の結果では表上直下から遺構が検出されており、樹木の除去時には遺構の破壊が予想された。そのため樹木の林立する範囲を加えて調査区を設定し、発掘調査を行なうことになった。その後、設計の検討により、一部の宅地の基礎部分が遺構面を削平することが明らかとなつたため、その部分を調査に追加した。調査区がいびつな形態をしているのはそのためである。

調査の結果、弥生時代後期と考えられる住居跡3基、古墳時代～古代と考えられる溝2条、ピット、土壌などを検出した。出土遺物は少なく、コンテナ6箱分に過ぎない。遺物の遺存は悪く、岡化可能な遺物も多くはない。

以下に調査経過を略述する。

11月26日に機材を搬入し、表土剥ぎを開始した。先述したように調査前は山林であったため、ゴミ廃棄や、ペットの埋葬のための穴が多く掘られており、搅乱の除去に手間がかかった。この間に弥永小学校からレベルを移動した。遺構検出、掘り下げの後、12月11日には北側部分の全景を撮影した。実測と補足調査を20日までに終了したが、先述のように一部建物基礎によって壊される部分が生じたため、24日にその部分の表土剥ぎを行ない、27日にすべての調査を終了した。

調査区の座標軸については、西側道路に平行する任意の人孔2点を基準とした。N-40° -Wを示す。

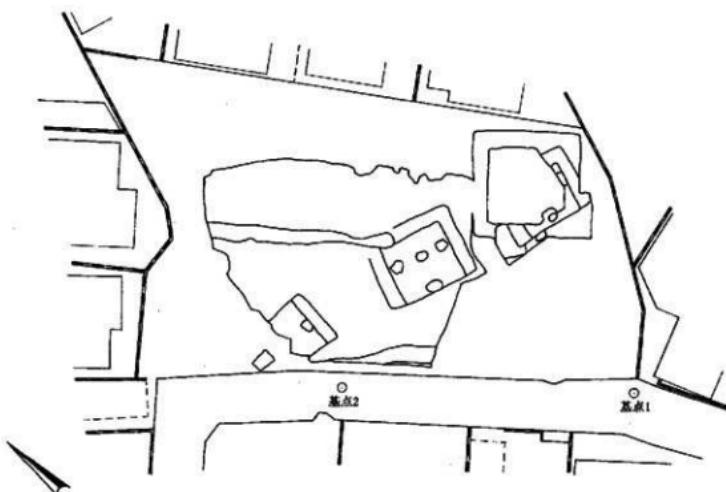


Fig. 4 調査区位置図 (1:400)

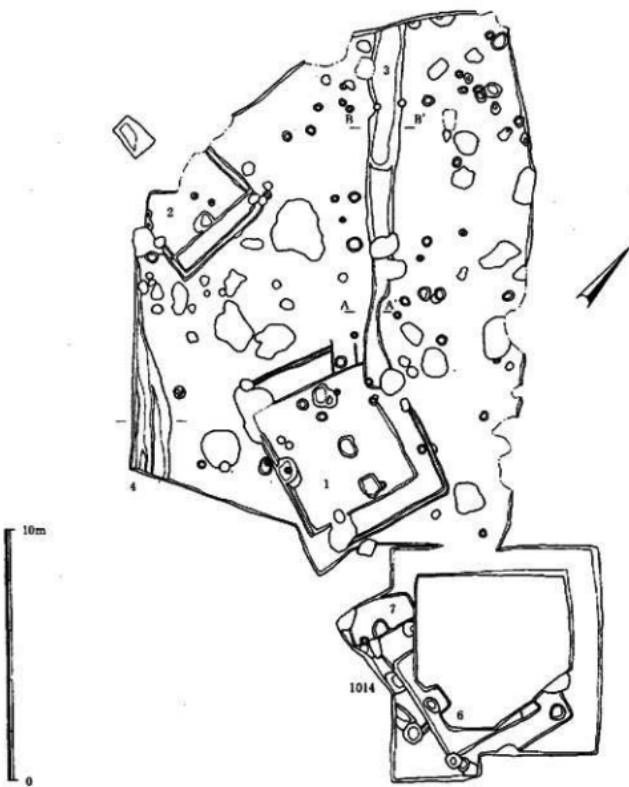


Fig. 5 調査区遭拂配置図 (1:200)

II. 調査の記録

(1) 検出遺構

1. 住居跡

住居跡は3基検出したが、この他に住居の一部である可能性がある遺構が2基あり、併せて報告する。3基の住居跡は、北西から南東に向けて直線的に並んでいる。

住居跡1 (Fig. 6)

調査区のはば中央で検出した。長方形を呈する。長辺7.6m、短辺6mを測る。南辺の中央に壁際土壌、中軸に2個の主柱穴、床面中央に炉跡を持つ。壁際土壌側を除く3辺にベッド状の高床部を持つ。壁溝は四周に巡るものと考えられる。ベッドはほとんど削り出しであるが、西側の一部は盛土による。主柱穴、壁溝、炉跡、壁際土壌には掘りなおしが確認され、住居が若干西側へ拡張されたことがわかる。古い柱穴などは地山埋め戻し土でつき固めたような状況を呈する。主柱穴は1辺80cm程の方形を呈する。床面からの深さ70cmほどで、深い。壁際土壌は床面から30cm程、炉は床面から10cmほどを測る。

住居跡2 (Fig. 7)

調査区の北西隅で検出した。全体の約1/2ほどの検出である。短辺4.5m、長辺3.5m以上を測る。炉跡が検出されていないので、長7m以上になると考えられる。東辺にベッド状遺構を持ち、本来は両短辺側に付く可能性が高い。主柱穴は2本で、東側のみ検出されている。床面からの深さは30cm程である。壁溝は四周に巡ると考えられるが、短辺側の溝は覆土に多量の地山ブロックを含み、故意に埋め立てられた可能性もある。貼床は確認されず、ベッド状遺構も削り出しである。なおこの住居跡の規模の確認のため、住居跡西側の、駐車場として使用されていた調査対象地外の部分にトレンチをいたが、既に削平を受けていた。図化に耐える遺物は出土していないが、覆土中からは弥生土器片が多量に出土しており、他の竪穴住居跡とはほぼ同時期と考えられる。

住居跡6 (Fig. 7)

最後に拡張した部分で検出した。基礎部分のみを周溝状に調査したので、一部分しか確認していない。住居の規模は、長辺7.2m、短辺5.1mほどの長方形に復元できよう。南辺の中央に壁際土壌を持つ。壁際土壌側を除く3辺にベッド状遺構が巡る。ベッド状遺構は削り出しで、幅1m程である。主柱穴は東側の1基のみ確認したが、調査区が狭く、完掘するに至らなかった。規模、形態、付帯施設の配置など、住居跡1に非常に類似する。壁際土壌中には拳大の礫が多数投棄されていた。

遺構7 (Fig. 8)

遺構7は住居跡6に切られる方形の遺構である。規模は2.5×3m程である。深さは10cmほどで極めて浅い。形態から住居の可能性も考えられる。わずかに弥生土器片が出土するのみである。この他、住居跡6の南壁中央付近から南へ延びる細い溝状遺構があり、住居の壁溝の可能性もある。

2. 溝 (Fig. 5, 9)

溝はほぼ平行して2条検出した。2条で道路の側溝をなす可能性も考えたが、その延長上はすぐ池となっており、道路の可能性は考えにくい。

溝3

調査区のはば中央を、ほぼ南北に走る。南端は住居跡1を切って、浅くなつて終息する。北端近くでは段をなして深くなる。幅は南端近くのとくに狭いところ(40cm程)を除けばはば1mほどである。調査区内での延長14.5mを測る。図化に耐える遺物はないが、覆土中から須恵器、土師器が出土しており、溝4とはば同時期とすれば古墳時代に属すると考えられる。

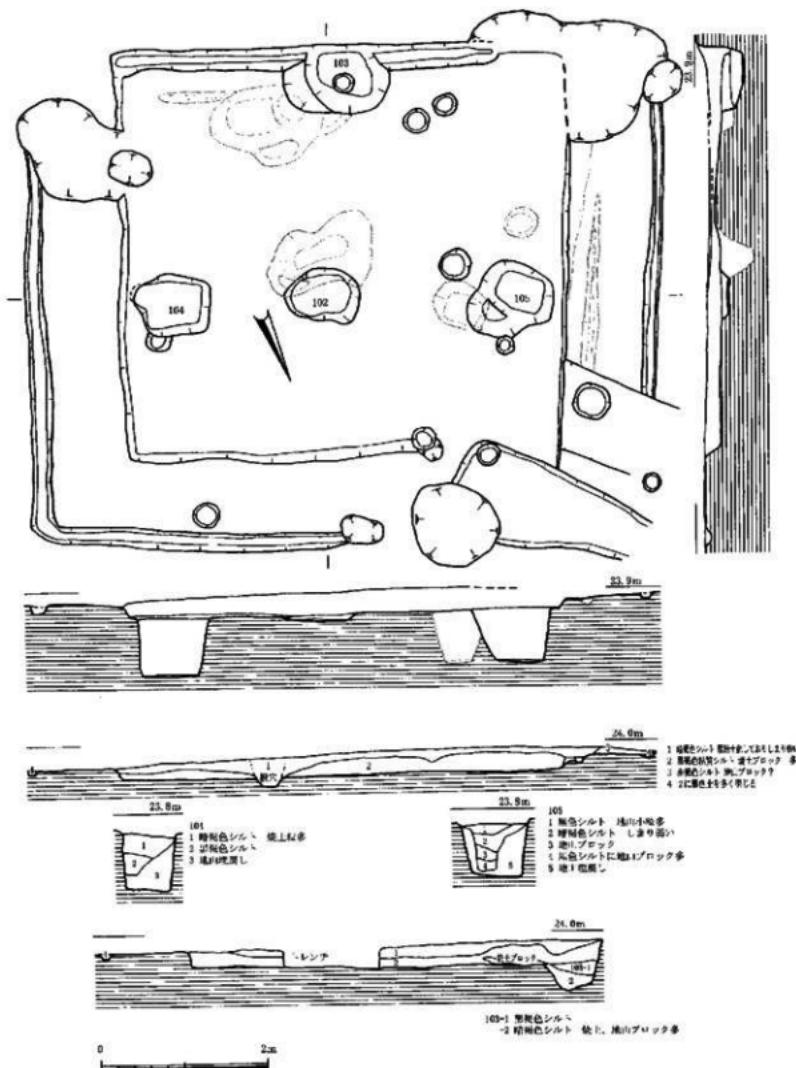


Fig. 6 住居跡 1 実測図 (1:60)

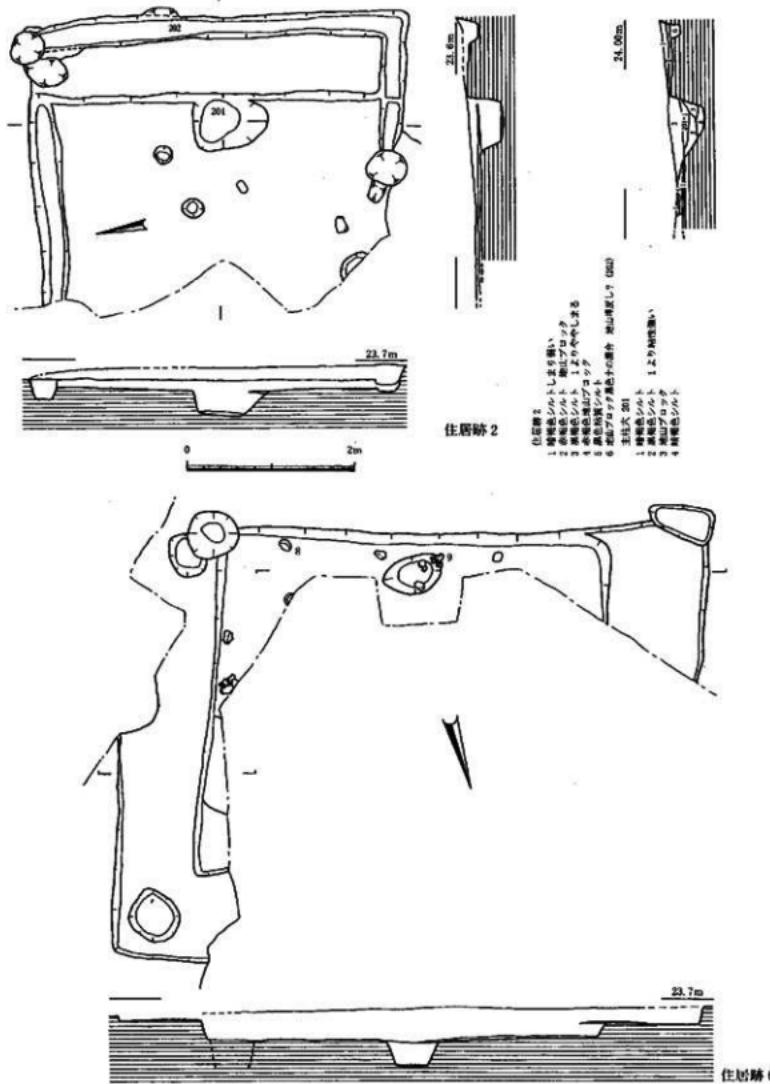


Fig. 7 住居2、6実測図 (1:60)

溝 4

調査区西端で検出した。やや蛇行するが、ほぼ溝 3 に平行すると考えられる。幅は 1~1.2m 程である。図化に耐える遺物は少ないが、覆土中から須恵器、土師器が出土しており、古墳時代後期以降に属すると考えられる。

3. その他の遺構

土壙 1014(Fig. 8) は、住居跡 6 に切られる。径 80cm 程の円形もしくは椭円形を呈する。深さは検出面から 30cm 程である。覆土中から完形の壺(11)が出土した。この他にも住居跡 6 の周辺には比較的大形のビットが集中する傾向が見られる。これに対して、住居跡 1、2 の西側などに散在するビットは規模が小さく深いものが多い。いずれにしても建物としてまとまるものは確認できない。

(2) 出土遺物

1. 住居跡 1 出土土器 (Fig. 10)

1 は壺の底部であろう。やや凸レンズ状を呈するが、胸部との境界は明瞭な稜線が立つ。内面にハケメが見られる。内外面ともかなり器面が荒れるが、内面にわずかにハケメが認められる。2 も底部である。小型の壺と考えられる。底部はわずかにふくらむ平底である。外面に縦方向のハケメが認め

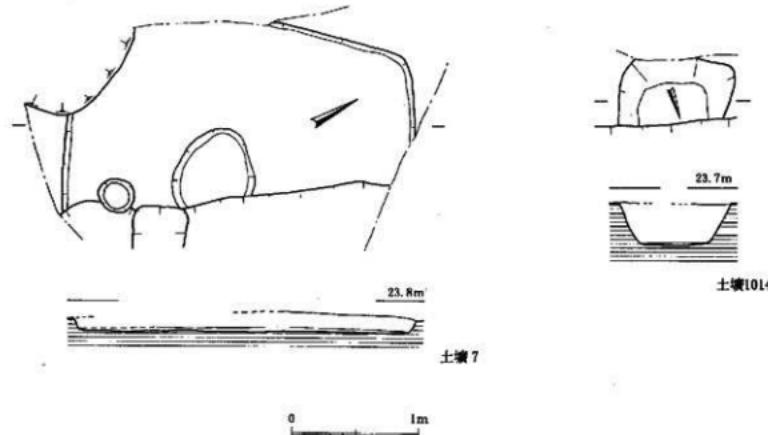


Fig. 8 遺構 7、土壙 1014 実測図 (1:40)

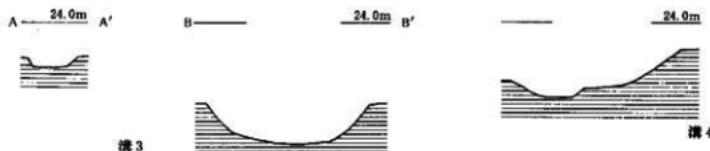


Fig. 9 溝断面実測図 (1:40)

られる。4も小型壺の底部である。手づくねではない。調整は不明である。5は壺の底部であろう。底部は凸レンズに近い平底で、胴部との境は明瞭な稜線が立つ。外面は底部までハケメを施した後、ナデ消しているようである。6は円板状に突出する底部を持つ。内面はハケメが横方向に施され、外面はかなり荒れているが、叩き状の凹みが認められる。畿内系の影響を受けた土器と考えられるが、胎土や色調は在地のものである。3は壺である。口縁は緩やかに屈曲し外反するが、内外面とも屈曲部に稜は立たない。口縁端部は坦面をなす。口縁部付け根に断面三角形の突帯を一条巡らせる。胴部はやや張るが、口径より小さい。器面の荒れがひどく、調整は不明である。これらの遺物からほぼ高三瀬式新段階～下大隈式古段階頃に該当するものと考えられる。

2. 住居跡6出土土器(Fig. 10)

10は直口壺の口縁部である。端部でわずかに外反する。内外面ともハケメを施す。8、9は鉢であろう。8は口縁部を欠く。器面荒れが著しいが、内面はハケメをナデ消しているようである。9は単口縁の鉢である。端部は薄く仕上げる。底部は厚さを増し、尖り気味になる。7は壺の底部であろうか。平底で、内面はハケメを施す。焼成後に内面から穿孔しかけているが、貫通していない。

3. その他の遺構出土土器(Fig. 10)

11は土塊1014出土の壺である。丸底の直口壺で、口縁部はわずかに外反する。偏球形の胴部である。器面荒れが著しいが、内面にはハケメが認められ、外面はナデ調整と思われる。12は溝4出土の須恵器口縁部である。端部は扁平に押さえ付けられている。頭部は強く外反する。小片ではあるが、小型品であろう。13は甌の胴部であろう。同じく溝4出土である。比較的厚手で、外面に文様を施す。沈線の上位に棒状工具による列点文、下位に波状文と列点文、その下に段があり、段の下位に再び波状文を施す。12、13は同一個体かもしれない。

4. 鉄、石製品等(Fig. 11)

1001、1002は住居跡6出土の鉄器である。いずれも片刃を持つ。身幅から見て、1001は刀子、1002は刀ではないかと思われる。2001は住居跡1出土の石器片である。石材は暗い小豆色を呈する立岩産の輝緑凝灰岩と考えられ、残存部の形態からも、石包丁の破片と考えられる。2002は、住居跡2出土の石製品である。筋理とは異なる方向に、人為的と考えられる溝が切られ、石錘の類ではないかと考えられる。3001は住居跡1に混入していた平安時代の瓦である。凸面は目の粗い格子目叩きで、一部をナデ消している。凹面は目の粗い布目痕がみられる。図上上端近くがナデ消されており、端部近くの破片と思われる。

第4章 小結

今回の調査では、弥生時代後期を中心とした集落のごく一部を検出したといえよう。集落の中心は、1次～3次調査の行なわれた付近であると考えられるが、その西側は、4次調査地点から南に延びてくる崖面によって画されていると考えられる。東側も曰佐原遺跡との間の谷に画されており、集落中心部は幅200m程の舌状台地の上に乗っているものと考えられる。

弥永原遺跡内では、前期土器の採集も伝えられており(弥永原遺跡1)、「道路南半の縁辺」といわれていることから、遺跡西側の広い沖積地を水田とした集落の存在も推定される。実際南西200mに位置する書院跡B遺跡では、弥生時代前期に属する水田が検出されている。しかし、弥永原遺跡では散発的の状況は推定の域を出ない。中期になると少數ながら遺構が散見される。2次調査、3次調査では中期後半の円形住居が検出されている。また3次調査A地区検出の、断面V字型の溝からも、少數

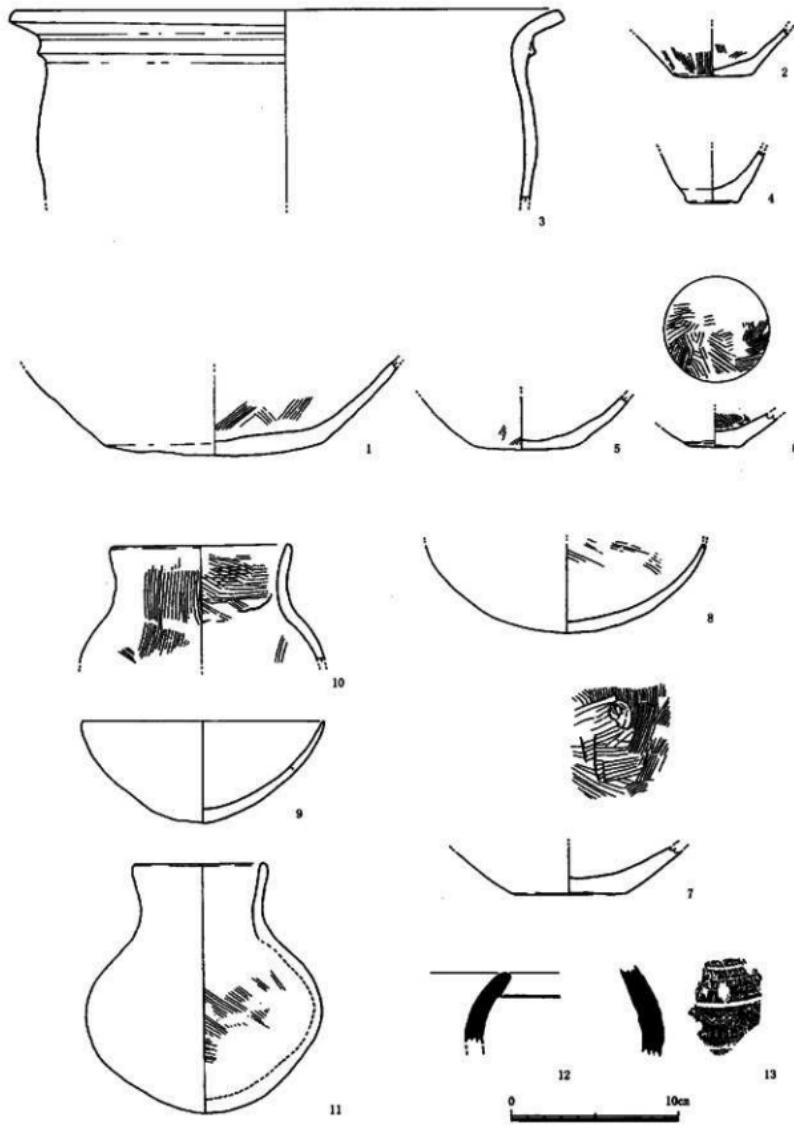


Fig. 10 出土土器実測図 (1:3)

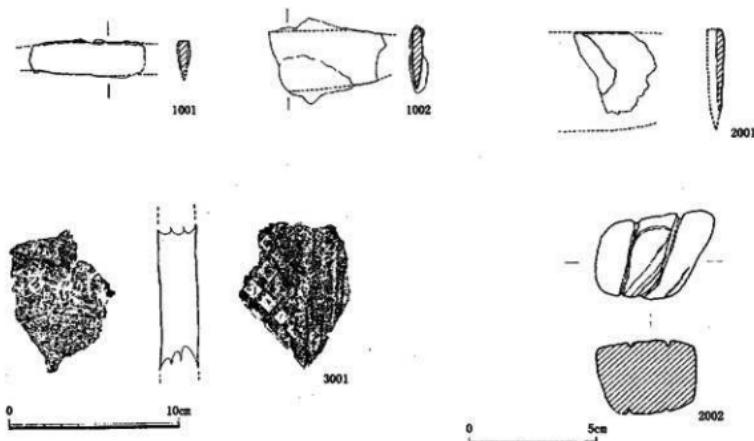


Fig. 11 出土石器・鉄製品等実測図 (1:2、1:3)

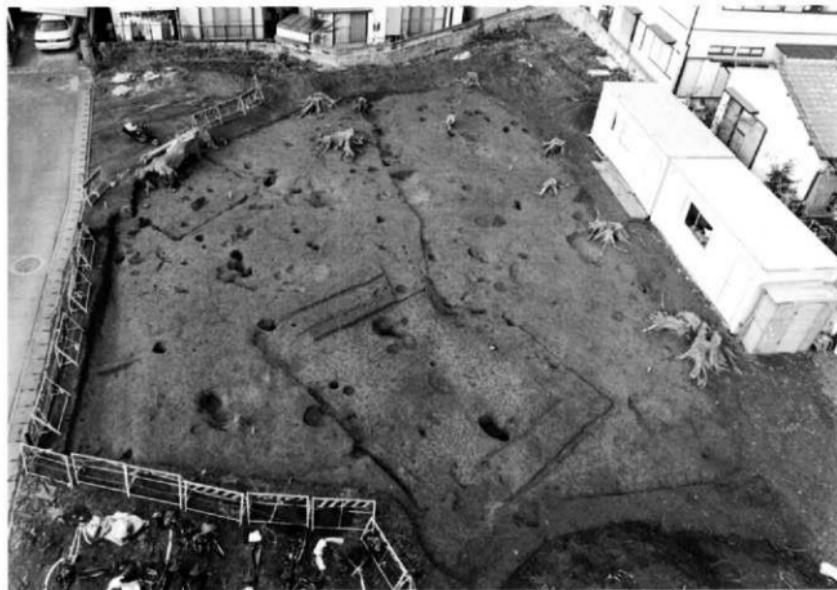
ながら中期土器が出土しており、溝の掘削時期が中期にさかのぼる可能性を示している。後期に入るると、遺構、遺物とも増加する。3次調査B地区には断面箱型の溝が掘削され、方形の堅穴住居も増加する。小形仿製鏡、ガラス勾玉鉄型など特殊な遺物も出土し、拠点的な集落としての様相を整えてくる。現在のところ、出土遺物は後期前半から中頃を中心で、後半から終末にかけての遺物はごくわずかである。しかし、3次調査では住居跡にかなり切り合いが見られ、ある程度長期にわたって集落が継続したこともしられる。

以上のような調査成果から見て、弥永原遺跡の場合も弥生時代中期から終末・古墳時代初頭にかけて、順調に継続、発展したのではなくて、ある程度の消長を繰り返していたと考えられる。その具体的な解明は今後の課題である。調査区周辺は住宅化が進んでいるものの、今回調査からの感触では専用住宅程度の建物の下には、まだ遺構が残存している可能性があると考えられる。集落中心部と思われる柳瀬1丁目地内は、今後注意が必要である。

図 版



(1) 調査区全景（北から）



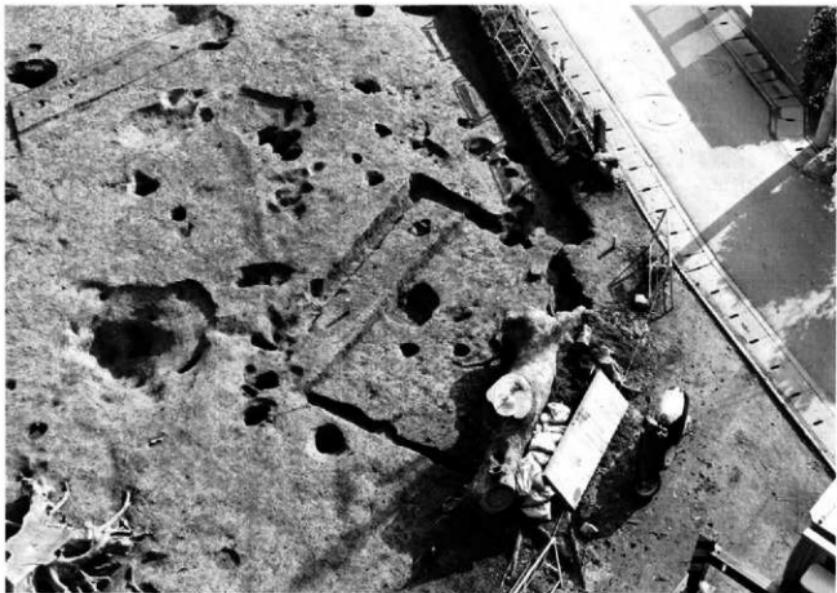
(2) 調査区全景（南から）



(1) 住居跡 1 (東から)



(2) 住居跡 1 完掘状況 (東から)



(1) 住居跡 2 (北から)



(2) 住居跡 2 完掘状況 (南から)



(1) 住居跡 6 (西から)

弥永原遺跡4

第5次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第604集

1999年1月14日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷機ミドリ印刷
福岡市博多区西月隈1丁目2番11号

